

『子どもの参画』によるまちづくり

～持続可能なまちづくりをめざして～

福島県石川町 南條 貴之



I. はじめに

衰退する日本の農山村。

耕作者を失った農地は荒れ果て、家主を失った空き家は朽ち果てるのを待つのみ。住んでいるのは、お年寄りばかりで子どもの声など聞こえてこない。とても残念なことではあるが、容易にイメージできてしまう農山村の情景ではないだろうか。農山村がこのような危機に陥っている原因はどこにあるのだろうか。

明治大学の小田切教授は、3つの空洞化が農山村に押し寄せている現状があるという。「人の空洞化」「土地の空洞化」「村の空洞化」。さらにこの3つの空洞化の連鎖を引き起こしているのが「誇りの空洞化」だと述べている。自分の地域に誇りを持ってないことが、このような農山村の状況を招いているのだとすれば、この「誇りの空洞化」を回避していかなければならない。

「若い子供達のエネルギーが地域の活力源である」これは、やねだんの豊重哲郎氏の言葉である。平成27年12月6日、石川町でその豊重哲郎氏による「地域づくり講演会」が開催された。地域づくりを語る上では、語りつくされた感のあるやねだんではあるが、石川町にとってはまだまだ参考になることがたくさんある。やねだんでは、豊重氏の言葉のとおり、地域の活力源として様々な活動に子どもたちを参加させている。そして、その子どもたちが大人になり、また、地域活動に関わっている。これこそが、地域の誇りが失われていないということではないだろうか。そしてこれが、やねだんの地域の強さではないかと先日の講演を聴講しあらためて感じられた。

また、豊重氏は「子供達の存在感を認め合い、底知れぬ孤独感を存分に発散させるためにも、地域活動は絶対に必要であり子供達はこんな地域を待っている。」とも述べている。

地域で子どもたちを育てることの大切さは、否定するものではないだろう。そこに、地域としての活動を取り入れ、地域活動の中で子どもたちを育てていく。そのことが、やねだんにみられる子どもたちを巻き込んだ地域活動なのではないだろうか。やねだんにおいて、この子どもを巻き込んだ地域活動のプログラムを実施することが地域の活力源だとすれば、石川町でも「子どもの参画」に着目したまちづくりを確立して行くことが「誇りの空洞化」回避のひとつの手段となるのではないかと考えている。

II. 目的と方法

本レポートでは、「誇りの空洞化」の回避手段として考える「子どもの参画」にフォーカスを当て、石川町の住民が誇りを失わないまちづくりが進められるよう、下記の3つの項

目を、図1フロー図に示す方法で明らかにしていきたい。

- ①効果的な「子どもの参画」を考えた事業の実施と検証
- ②「いしかわ版アクション・リサーチ」方法の提案
- ③今後の石川町の「子どもの参画」のまちづくりへの提言

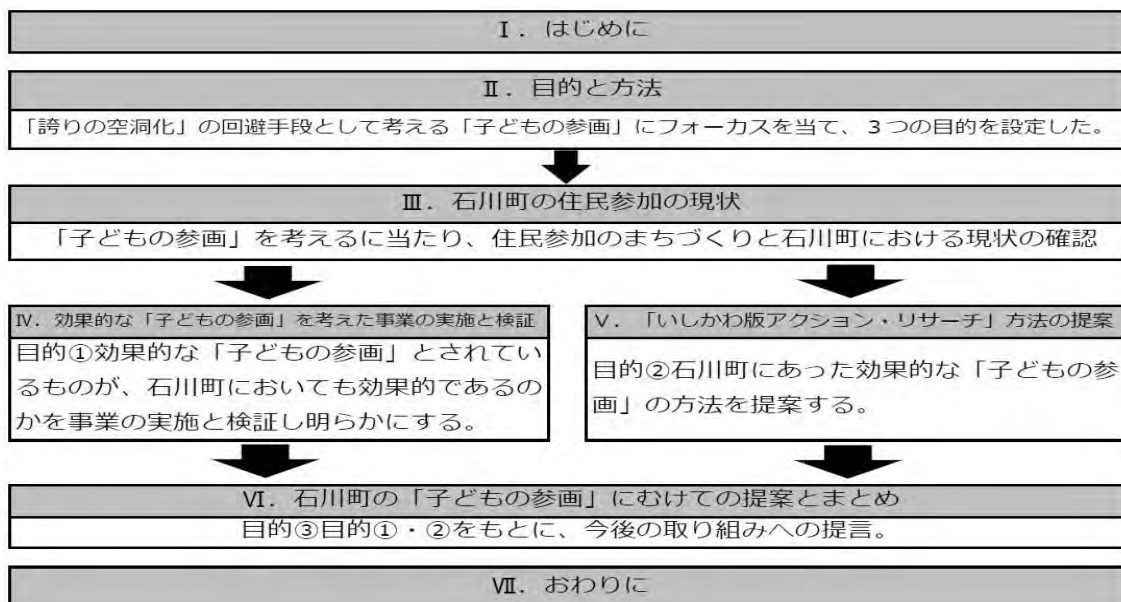


図1：レポートのフロー

III. 石川町の住民参加の現状

(1) 住民参加のまちづくり

まちづくりへの住民参加が叫ばれるようになって久しい。中でも、アメリカの社会学者シェリー・アーンスタイン（1969）の提唱した「住民参加のはしご」（図2）は、今までも様々な住民参加の場面において住民参加の段階をわかりやすく体系化して示してあるものとして活用されている。



図2：住民参加のはしご（シェリー・アーンスタイン 1969）、協働のデザイン（世古一穂 2001）をもとに筆者が作成

この「住民参加のはしご」では、住民参加の段階が大きく3つに分類されている。このはしごを指標として考えると、6段目以上「住民の力が生かされる住民参加」に位置づけられるようなプログラムを行っていくことが、効果的なまちづくりにつながっていくと考えられる。

それでは、この「住民参加のはしご」を指標に石川町の現状を見ていきたい。

(2) 町の現状

平成27年3月31日、福島県石川町にある6つの小学校と1つの中学校が閉校した。学校の統廃合については、教育分野と地域づくり分野の考え方に大きな隔りがある。

石川町においてもこの隔りが拭い去れないまま「子どもの教育環境の改善」と言う考えが先行され、統廃合が進められた。今のところは、まだ統合後1年も経過していないため、目立った影響は出ていない。しかし、他の自治体を見ると、学校の統廃合の影響による地域の空洞化現象が見受けられる事例も少なくない。

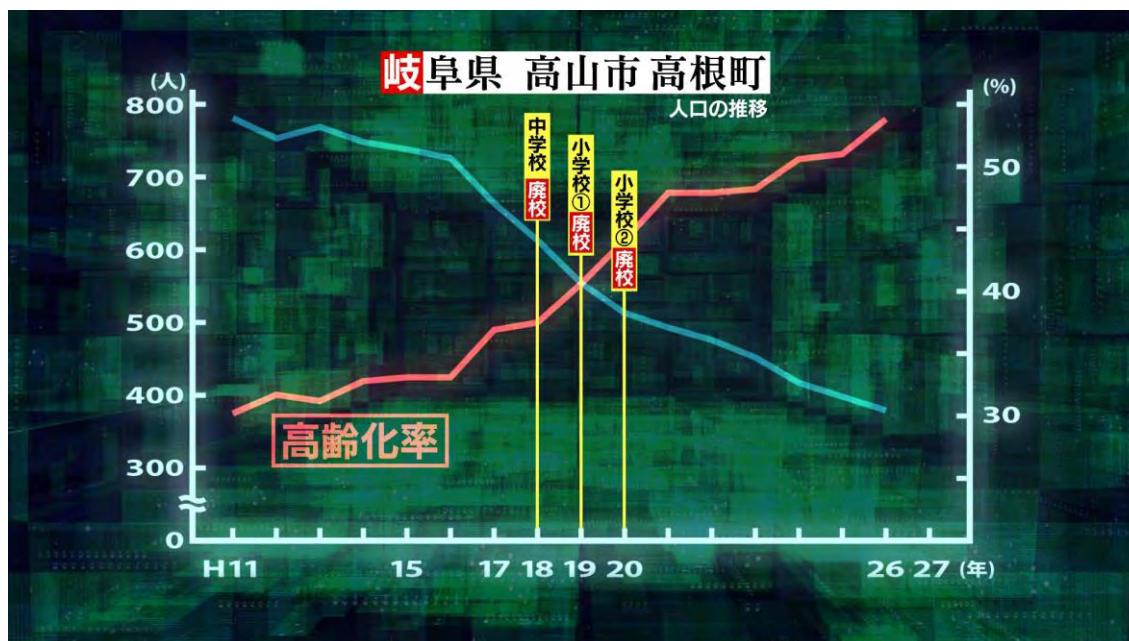


図3：岐阜県高山市高根町の人口推計 (NHK DATA FILE より)

図3は、市町村合併により学校がなくなった岐阜県高山市高根町の人口推移である。それまで700人前後で推移していた人口が、学校の統廃合が問題となってから激減している。それに伴い高齢化率も非常に高い伸び率になっている。若者が集落からいなくなったのである。地域から学校がなくなってしまった喪失感。それが、地域への誇りが失われるきっかけとなり、このような状況に陥ってしまった原因の一つと考えることができるのではないだろうか。これは、これからの集落の存続を考えると非常に大きな問題であろう。

本来、学校統廃合と同時並行で統廃合後の地域のケアも行っていかなければならないのだろうが、石川町では目立った手立てはとられていない。先述の事例から、石川町でも学校がなくなってしまった地域の空洞化が進むことも大いに考えられる。これは、手放しで

見ていられる状況ではない。

地域のケアは、必ずしも地域住民の学校を失った喪失感を拭い去ってあげることだけではない。喪失感を拭い去るという後ろ向きのケアではなく、これから学校がない地域をどうしていくのかという前向きなケアが重要だ。

(3) 住民参加の現状と課題

石川町においては、この学校の統廃合に先立ち、平成21年度に策定した第5次総合計画でまちづくりの将来像を「みんなが主役 協働と循環のまち」と定め「とき」「ひと」「もの」をキーワードに住民参加のまちづくりに取り組んでいる。

中でも、一番の目玉として取り組んでいるのが地域自治協議会の設立である。これは、石川町を6つの地区に分け、それぞれに自治協議会を設立し地域自治を目指していくことを目的としている。

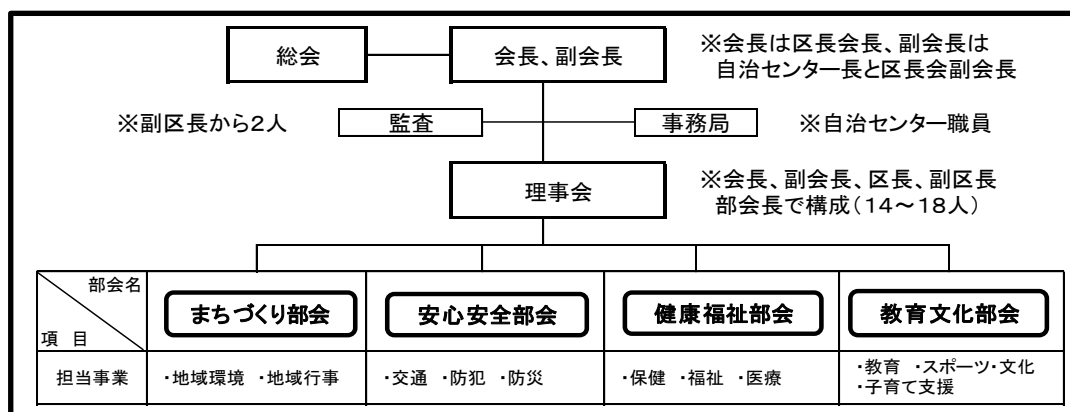


図4：石川町の自治協議会組織（案）として筆者が作成

図4に示したのが、自治協議会として目指していく上で、先進地や現組織体制を踏まえ、石川町にとって効果的であろうと考えている組織体制である。このような組織体制を確立し、地域自治を実現可能なものとするため、現在設立準備委員会を立ち上げ話し合いが進められている。この話し合いも初めから順調に進んだわけではなく、上記の組織案を示すまで、先進地への視察も含め計10回以上の会議を開催している。会議の中で、とても多く聞かれた意見としては、以下の2つがあげられる。

- ①この組織が自分たちの地域になぜ必要なのか。
- ②組織を誰が運営していくのか（役員や各種委員）

この2つの意見は、組織体制を示す時期を迎えている現段階でも、話し合いの中で感じられる場面もあり非常に根深いものがあると感じている。設立後の協議会を運営していく上でも、このような意見が出てくる原因を探ることはとても重要ではないかと考えている。

地域自治協議会は、先述したアーンスタインの「住民参加のはしご」を指標にすると、6段目以上の住民参加を求めて設立するものであることは確認できる。しかし、この6段目に達するために、1段目から順良く上がっているわけではない。アーンスタインの「住民参加のはしご」自体、そもそも1段目から順良く上っていけば6段目に達することができるということ示しているものではなく、今の状況（今後目指すべき姿）がどの段階にあ

のかという結果だけを確認するだけのものである。住民参加の活動がどの段階にあるのかを測る尺度としてはもちろん有効なのだろうが、どのようなプロセスで6段目以上に達すれば良いかまでは確認することはできない。しかし、1段目と6段目以上を結果として求める場合、6段目以上を求めるほうがより住民の主体性が重要になってくることは明らかであろう。それに伴い、町側も段階に応じたプロセスが必要になってくる。石川町では、今まで3段目以下の住民参加の形が非常に多かったため、住民も3段目以下の住民参加の感覚がとても強い。そのような中で、6段目以上の強く住民主体を求める動きに対し住民が強い拒否感を示したことが拭いきれない疑問につながっているのではないかと考えられる。

以上のようなことから、「住民参加のはしご」で示されている6段目以上のまちづくりを進めていくためには、町の成長もさることながら、6段目以上を目指すだけの主体性を持ってまちづくりに取り組めるような住民を多くすることが重要である。しかし、主体性を持ってまちづくりに取り組める住民を増やしていくことは一朝一夕にはいかない。さらに、自治協議会の話し合いからもわかるように、大人になってから主体性を持つと言われても、なかなか受け入れることが難しいのも事実である。

だからこそ、学校統廃合後の地域の前向きなケアや、自主性・主体性を持ってまちづくりに取り組めるような住民を増やしていくためにも、子どもの頃からまちづくりに携わり、そのまちづくり活動から、子どもたちを育てていく。石川町全体として時間をかけて人づくりを進めていかなければならない。

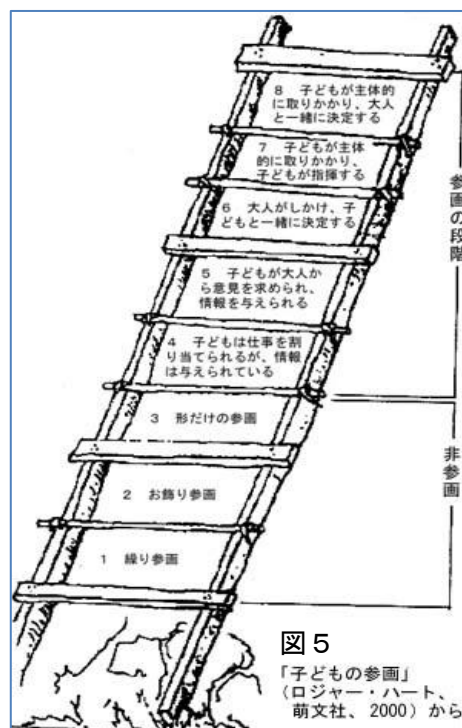
IV. 効果的な「子どもの参画」を考えた事業の実施と検証

(1) ロジャー・ハートの「子どもの参画」

では、将来、主体性を持ってまちづくりに取り組めるような子どもたちを育てていくためには、どのようなまちづくりへの参加方法が効果的なのかを考えていきたい。

図5は、ニューヨーク市立大学教授のロジャー・ハート(1992)が、先に示したアーンスタインの「住民参加のはしご」を参考に提唱した「参画のはしご」と呼ばれているものである。子どもの参画を8段階に分けて最初の3段が「参画とは呼びがたいもの」。4段目以降を「本物の参画」と定義づけしている。この「参画のはしご」も、多くの「子どもの参画」の実践者・実証者によって用いられてきた。

ハートは、「子どもの参画」においてとてもプロセスが大切だと述べており、参画するにあた



っての対話や相互理解などといったコミュニケーションがとても重要なエッセンスであるとしている。

アーンスタインの「住民参加のはしご」にこのエッセンスを加えることにより、子どもの主体性や自主性が尊重されプログラムのプレイヤーとして、子どもたちが本当の力を発揮することができるとしている。

また、アーンスタインの「住民参加のはしご」にはない、「大人と子どものパートナーシップ」の重要性を理論の中心と考えているところもあり、プログラムを進めていく上では、社会的に力のある大人とともに活動することで、子どもたちは、今まで見せたことのなかった能力を発揮したり、重要な役割を果たしたりすることができるとしている。以上のような、考えを付加した中で、子どもの参画までのプロセスとプログラムにおいての大人と子どもの関わり方の度合いの指標として「参画のはしご」が示されている。

この「参画のはしご」が示されたことにより、結果だけを評価指標するものとして用いられてきた「住民参加のはしご」が、子どもがまちづくりプログラムに参加する際に、参画までのプロセスや大人と子どもの関係性を重視しながら「本物の参画」に分類されるようなプログラムが実施できるようにするための指標として活用されるようになった。

石川町でも、子どもたちを巻き込んだ「本物の参画」プログラムを実施して行く上で、この「参画のはしご」を指標として取り組んでいくことが重要だと考えている。

さらにハートは、「本物の参画」に分類されるようなプログラムを実現するための方法として、「アクション・リサーチ」という方法論をベースに考えている。

(2) アクション・リサーチ

「アクション・リサーチ」とは、心理学者のレヴィン（1944）らによって提唱されたもので、現在では心理学、教育分野と幅広い分野で活用されている方法論である。

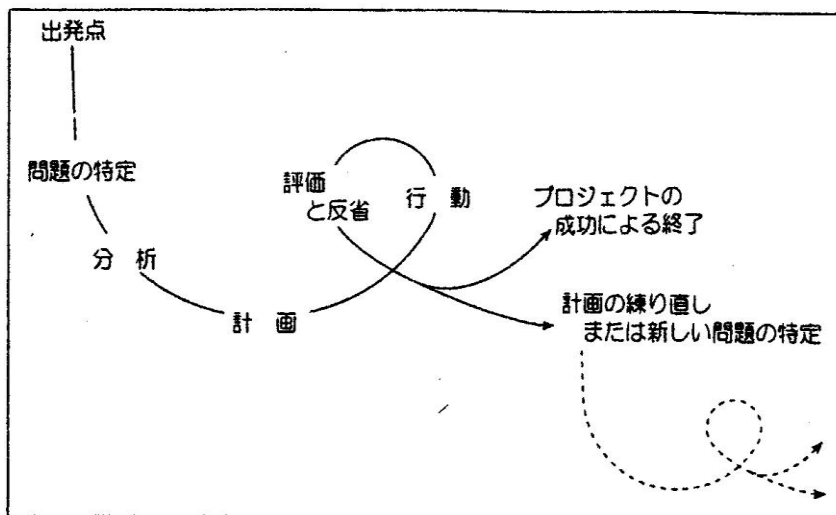


図6：アクション・リサーチのプロセス子どもの参画（ロジャー・ハート 萌文社 2000）から

上の図6は、ハートが示した「アクション・リサーチ」のプロセスである。まずは「問題を特定」、そこから「分析」をして「計画」し「行動」に移し、それを「評価・反省」を

する。そこで解決すれば「終了」。解決しなければ「分析」のやり直し「計画」の練り直しをへて、同じプロセスを繰り返すことになる。このプロセスからもわかるように、アクション・リサーチはトップダウン方式ではなくボトムアップ方式で研究調査を進めていく手法である。

前項で述べた、ハートの「子どもの参画」の考え方と、この「アクション・リサーチ」の方法論を取り入れながらプログラムを実施することによって、「参画のはしご」の定義する「本物の参画」になり得るプログラムを実践していくことができるのか。また、石川町のプログラムや参加者の意識にどのような変化をもたらすのかを以前のプログラムと比較しながら検証したい。

さらに、検証によって感じられた問題点を提起しその解決方法に結び付けたい。

(3) 石川町における「子どもの参画」の実践・検証

ここで比較検証するのは、平成26年度と平成27年度に行った、以下の表に示した2つの事業である。

表1: 石川町における「高校生ワークショップ」の実施比較(実績をもとに筆者が作成)

実施年度	平成26年度	平成27年度
事業名	高校生ワークショップ	「高校生と考える」 まちづくりワークショップ
主催	石川町	石川町
参加対象者	県立石川高校(生徒会役員・演劇部) 学法石川高校(生徒会役員)	学法石川高校(指定なし)
開催日時及び内容		
第1回	12月11日16:30～ 参加者26名 場所: お菓子のさかいイベントスペース レクチャー: まちづくりについて 自己紹介	12月4日16:30～ 参加者20名 場所: 学法石川高校会議スペース レクチャー: 歴史について まちづくりについて
第2回	1月21日16:30～ 参加者22名 場所: お菓子のさかいイベントスペース グループワーク: 石川町の強みと弱み	12月10日13:30～ 参加者38名 場所: 鈴木重謙屋敷跡地 作業: 芝生張り
第3回	2月4日16:30～ 参加者20名 場所: お菓子のさかいイベントスペース グループワーク: 発表	12月21日17:00～ 参加者45名 住民参加20名 場所: 鈴木重謙屋敷跡地 作業: イルミネーション設置・点灯式
第4回	3月5日16:30～ 参加者17名 場所: お菓子のさかいイベントスペース グループワーク: フィールドワーク準備	日時: 未定 場所: 未定 内容: 居場所づくり①
第5回	3月6日～20日 個人ワーク: フィールドワーク ※課題提出者 1名	日時: 未定 場所: 未定 内容: 居場所づくり②

この事業は、どちらも町内の高校生を対象に行う事業で、平成27年度についてはまだ途中経過という形ではあるが、12月～3月まで行うこととなっている。これら2つのプログラムを見比べると、明らかに参加者数の動向に違いがみられる。この、参加者数の動向については複数の要因があると考えられるため原因を一つに絞ることは難しい。今回は参加者がどのような経緯でこのプログラムに参加したのかという点とそれぞれのプログラムがどのようなプロセスで進められていったのかという側面からこの動向について分析してみる。そのうえで、平成27年度のプログラムが「参画のはしご」の何段目に位置するプログラムといえるのかを考察したい。

①参加の経緯

まず、平成26年度は、町内の2つの高校を対象に参加者を募集した。さらに、最低限の参加者数を確保するため、生徒会役員と演劇部の生徒を中心に募集を行った。一方、平成27年度は、対象を学法石川高校だけとし募集を行った。また、前年度とは違い特定の生徒に参加を促すことはせず、広い形での募集とした。

この募集方法の違いが参加者にどう影響したのか。

下記の表2は平成26年度の参加者を対象に行ったアンケート結果の一部を抜粋したものである。

表2: 平成26年度参加者アンケートより一部抜粋	
Q1. 今回参加した理由はなんですか(複数回答可)	
1. 高校生活動に参加したかったから。	0人
2. 先生に勧められたから	8人
3. 校内活動の一環で(生徒会等)	18人
4. 自分の良い経験になるから。	3人

このアンケート結果から、参加者たちが自分は「生徒会役員だから・・・」「演劇部だから・・・」という立場上での参加になってしまっていることがわかる。参加者を限定して募集をした結果、参加者が義務的な参加になってしまったのではないだろうか。先述したように、「子どもの参画」は子どもたちの主体性や自主性がなければならない。この、自主性が立場上参加している参加者たちに欠落してしまったことが、参加者の減少を招いてしまったのではないかと考えている。

一方、平成27年度については、参加者を限定しなかったため1回目の参加者は前年度よりも少人数とはなったが、生徒たちが自主性を持って参加しているため、その後減少するという状況は免れた。それどころか、逆に増加する傾向がみられた。主催者側も学校側も参加者を増やす手立て(再募集のチラシを配布するとか学校の先生に声をかけてもらうとか)は行っていないことから、参加者からの広がりが大きかったのではないかと考えられる。このことから、参加者たちが自主性をもってプログラムに参加するか否かで、その後の参加者数の動向に大きな影響があることが見て取られた。

②プログラムのプロセス

それでは、プログラムの内容についてはどうだろう。下記の表3は表2と同様、1回目のレクチャー終了時に参加者に記入していただいたものである。

表3:平成26年度参加者アンケートより一部抜粋

Q2. 今日のレクチャーはどうでしたか？	
1. とても勉強になった	25人
2. 良かった	1人
3. 難しかった	0人
4. その他	0人

このアンケートからは、参加者はほぼ満足してレクチャーを終えたことがうかがえる。このことから、参加者の減少を招いたのは内容の良し悪しではない。では何が原因か。

それは、内容よりもそこに至るプロセスが重要ではないかと考えられないだろうか。そのような考えのもと、平成27年度を見てみよう。

平成27年度は、ハートもベースにしていると紹介した「アクション・リサーチ」を取り入れた中でプログラムを実施した。下記の図が平成27年度の実際のプロセスである。

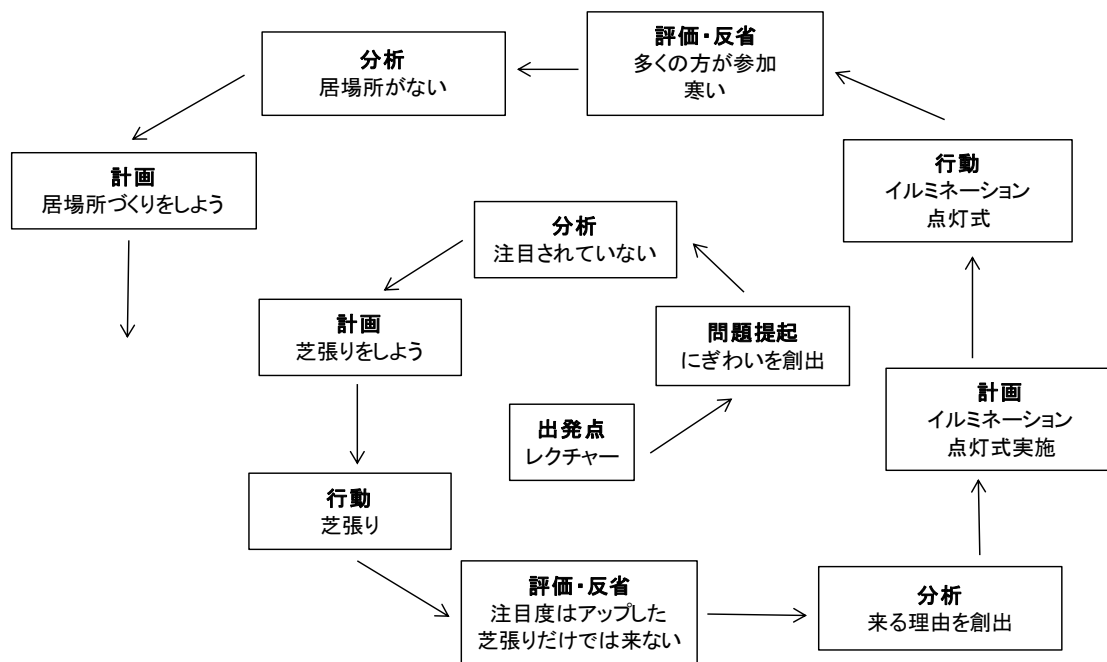


図7：平成27年度「高校生と考える」まちづくりワークショップにおけるアクション・リサーチのプロセス

この、アクション・リサーチのプロセスで特に気を付けた点は、「出発点」と「行動」への意味付けである。

前年度においては、レクチャーの内容に参加者が満足していたにもかかわらずその後には繋げることができなかった。上の図を見てもわかるように、レクチャーは出発点である。

次に繋がらなかったことを考えると、出発点自体が間違っていたと言わざるを得ない。同じプログラムを実施するにしても、参加者にどれだけの知識がありどれだけの情報を持っているのかをしっかりとコミュニケーションの中で把握し出発点を決めなければならない。さらに、その後参加していただくだけの力や考え方を参加者たちへつけてもらう必要も出てくる。大人が勝手に決めた出発点からはうまくスタートは切れたとしても、点でバラバラの方向に走り出しているようなもので、到底同じゴールにはたどり着けない。しっかりと参加者を見極め、慎重にスタートを切ってあげることがとても重要である。

次に「行動」への意味付けであるが、プログラム中での行動においては参加者が「自主性・主体性」を持つことがとても重要だ。「なぜ、行うのか」と言う参加者に対してちゃんと意味づけをしてあげなければならない。そして、その「行動」が「自主性・主体性」によるものだと参加者に考えてもらう必要がある。ただし、「アクション・リサーチ」の紹介で述べたようにこの意味付けは、トップダウン方式ではなくボトムアップ方式でなければならない。平成27年度は、このボトムアップでの意味づけをし「自主性・主体性」による「行動」に移すことができた事が、参加者の動向に大きな影響を及ぼしたのではないかと考えている。

(4) 「子どもの参画」プログラムの考察

前項の比較分析から、まず、「出発点をどこにするのか」「どこから出発するのか」を子どもたちとコミュニケーションを取り見極めてあげることが重要だ。さらに、「アクション・リサーチ」の方法を取り入れ、しっかりと参加者に「自主性・主体性」を持ってもらうことが、その後の参加者の動向に大きな影響を及ぼしたことが確認できた。また、これらのことを留意しながらプログラムを進めたところ、平成26年度には見られなかった参加していない生徒たちへの広がりも見られたことから、参加者の意識の変化が見て取れるであろう。そして、平成27年度については、対象となる高校生だけでなく一般町民も巻き込む結果となっており、今後さらなる広がりも期待できる。

以上のような結果から、残念ながら平成26年度のプログラムについては、「参画のはしご」で示されている「参画とは呼びがたいもの」に分類されてしまうだろう。しかし、平成27年度のプログラムについては、参加者の自主性や主体性また、多方面への広がりから「本物の参画」と呼べるプログラムになり得るのではないだろうか。このことから、「アクション・リサーチ」によるプログラムの実施は、石川町においてもとても効果的ではないかと考えられる。

(5) 「子どもの参画」プログラムの問題点

「アクション・リサーチ」における「子どもの参画」は非常に有用な手段であることは、前項の比較分析からの考察により確認はできた。しかし、今回実施したことで、今後石川町において、この「アクション・リサーチ」のプロセスによるプログラムを実施するに当たりボトルネックになり得る問題も見えてきた。

今回実施したプログラムにおいて、図7の「アクション・リサーチ」のプロセスからは

読み取ることにはできないが、前年度と比べてとても多くの時間を要している。今回のように時間が取れる参加者を対象にする場合は問題ないが、今後、石川町が「子どもの参画」プログラムを実施するに当たり対象とするのは、高校生だけではない。プログラムによっては、小学生や中学生の参加で実施したほうが効果的なものもあるだろう。そのことを考えると、今回の方法をすべてのケースに取り入れることは難しい場合も出てきてしまう。

この問題を解決し、石川町においても効果的だと考えられる方法を活用し、今後実施されるプログラムが「本物の参画」となれるよう、「いしかわ版アクション・リサーチ」方法を提案する。

V. 「いしかわ版アクション・リサーチ」方法の提案

(1) 時間的制限

今回の参加者である高校生については学校の協力もあり、時間をかけて取り組むことができた。しかし、レクチャーから、一つの行動に移るまでの確認作業を考えると、小中学生を対象にした場合は非常に難しい。時間的に余裕がない中で実施されるプログラムについては「本物の参画」にたどり着くことができずに完結してしまう恐れがある。

今後、実施する「子どもの参画」プログラムが「本物の参画」にたどり着くよう、石川町の子どもたちの実情を踏まえた中での環境づくりが必要と考える。

そこで、図8に示した「いしかわ版アクション・リサーチ」の方法論を提案することにする。

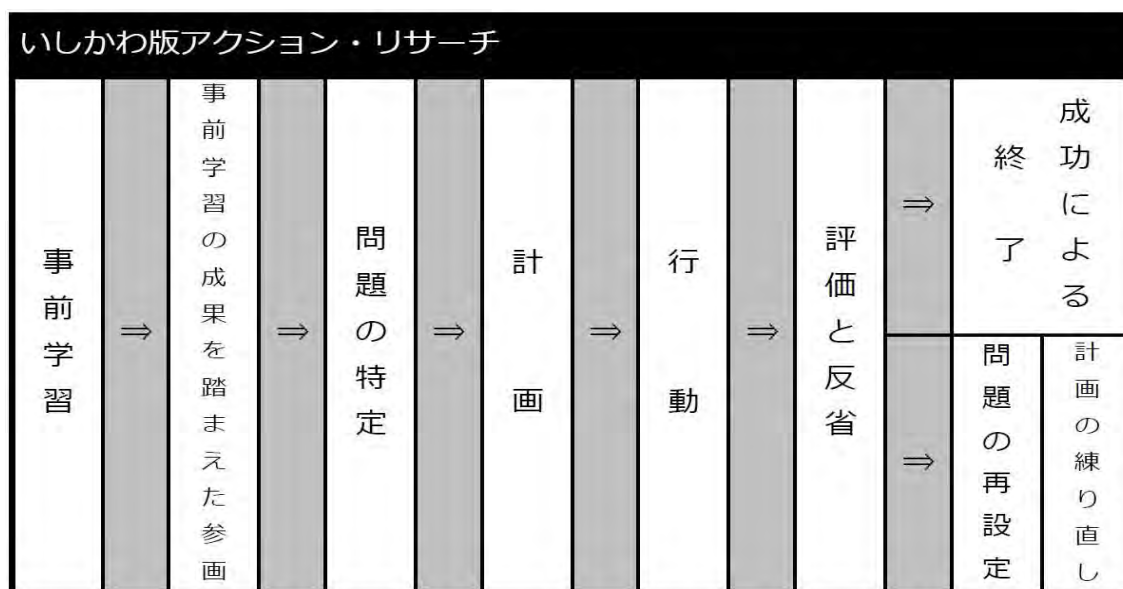


図8：「いしかわ版アクション・リサーチ」筆者作成

(2) 事前学習

まず、ポイントの一つ目は、事前学習を取り入れることである。子どもたちが自分の住む町について学ぶことの重要性は言うまでもない。石川町でも現在「ふるさと教育の推進」として総合学習の時間を利用して学習プログラムを実施している。そういう意味では、石川

町では事前学習を取り入れることは容易な部分もある。

この、学習プログラムの中で、その後のまちづくりに参画していくことを意識した事前学習を取り入れていくことができれば、その後のまちづくりプログラムに参加する下地がしっかりと子どもたちに出来上がる。このしっかりとした下地を子どもたちに作ることに、その後のプログラムへの参加がとても容易になると考えている。ハートの「子どもの参画」翻訳者でもある千葉大学教授の木下勇氏も「アクション・リサーチのプロセスも、またワークショップのプロセスも、そのプロセスが情報の視野を広げ、意識と判断能力を高めていく。このようなプロセスこそ総合学習の時間で用意することができるものである」と述べているように、この総合学習の時間の中で「事前学習」を行うことにより、プログラムに参加する際の主体性や自主性を高めるための学習を行う事は非常に効果的である。

また、そのことにより、プログラムを実施する際のプロセスを大きく割愛することが可能になり、時間的制限がある参加者によるプログラムも「本物の参画」と位置付けられるプログラムへ押し上げることが可能となるだろう。

(3) 事前学習の成果を踏まえた参画

さらに、この「いしかわ版アクションプログラム」を取り入れることによって、プラスアルファの効果も期待できる。

事前学習の成果によって、子どもたちが、今、まちに対してどこまでの知識と情報を持っているのかが分かるようになる。下の図9のようなカテゴリ別に学習内容が確認できるような方法をとることができれば、なおわかりやすい目安とすることができるだろう。

いしかわ版アクション・リサーチ「事前学習」		
カテゴリー	学習課題	参画プログラム
小学校低学年	いしかわまちを知る①	各まちづくり プログラムへの参画
小学校中学年	地域活動への参加	
小学校高学年	石川町を知る②	
中学1・2年生	地域研究・職業体験	
中学校3年生	8年間の学習・プログラム参画のまとめ 成果発表	

図9：「いしかわ版アクション・リサーチの事前学習」

これを目安に、「子どもの参画」プログラムを実施する主催者側が、実施内容に必要な最低限の知識と情報を持ったカテゴリーの子どもたちを参加させることができるようになり、今まで、何の判断材料もなく子どもたちを選んでプログラムに参加させていたことを考えると、より効果の高い結果を得ることも期待できる。

また、木下氏も「子どもの参画」プログラムを実施するに当たり「未熟な子どもという大人の固定概念を変えるためにも、大人と子どもが向き合う何らかの仕掛けが必要である。」と述べているように、プログラムに参画するための力が備わった子どもが参加するとなれ

ば、大人たちも子どもを「未熟な子ども」ではなく、プログラムの出発点と一緒に立つパートナーとして認めることができるようになる。それにより、大人と子供がしっかりと向き合うことで、ハートのいう「大人と子どものパートナーシップ」が確立され、効果的なプログラムの実践が可能となるベースがしっかりとできることであろう。

VI. 石川町の「子どもの参画」に向けての提案とまとめ

ここまで「子どもの参画」について考えてきた。子どもがまちづくりへ関わることの重要性は、様々な先行事例の中で実証されてきている。しかし、その実証事例を石川町にそのままコピーしてもうまくはいかないだろう。なぜなら、プログラムに参加する「子どもたち」が違うからだ。だからこそ、石川町にあった「子どもの参画」を考えなければならない。

「いしかわ版アクション・リサーチ」を取り入れ、自分たちのまちを学び、まちづくりを学ぶ機会を増やし、プログラムに参加する力量を持った子どもたちを数多く育てることが、今後のまちづくりに非常に大きな役割を果たすだろう。そしてその子どもたちが「子どもの参画」プログラムに参加し、実際に活動する大切さを学ぶことが、将来の担い手として成長するには必要不可欠なことだろう。

活動の中で子どもたちを育てていくやねだん。それと同じように、「子どもの参画」プログラムの中で子どもたちを育てていく。

「誇りの空洞化」を回避するためには、そのような環境を作り上げることが大切で、その環境の中で子どもたち一人ひとりの地域への想いが醸成されることにより、やがて地域への誇りにつながっていくのではないだろうか。

VII. おわりに

日本全体、人口減少が進む中、今後の対応として必要なのは増やすことではなく、必要以上に減らさないことだと考えている。人の空洞化の引き金となる誇りの空洞化が広がらないためにも、子どもたちが誇りを持てる地域にしていかなければならない。

「子どもの参画」を通して、子どもたちが自分の生まれ育った地域に誇りを持ち、地域への誇りを持った子どもたちが数多く育てることを、時間をかけて行っていかなければならない。

そして将来、やねだんのように大きくなった子どもたちがまちづくりに参加し、持続可能なまちづくりができるようになれば、「誇りの空洞化」など想像することはできない、活力あふれるまちとなるだろう。

《参考文献・HP》

- ・地域再生 行政に頼らない「むら」おこし（豊重哲郎）
- ・子どもの参画 コミュニづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際
（萌文社 著・ロジャー・ハート 監修・木下勇、田中治彦、南博文 訳 IPA日本支部）
- ・子ども・若者の参画 R.ハートの問題提起に答えて（萌文社 朝倉景樹・新谷周平ほか）
- ・まちなか再生行動計画書（石川町）
- ・いしかわ教育推進全体計画（石川町教育委員会）
- ・特集／「場所の感覚」と補完性の原理「都市計画と公共の福祉」に関する「子どもの参画」と「場所の感覚」からの考察（千葉大学園芸学部教授 木下勇）
- ・立正大学学術機関リポジトリ（<http://repository.ris.ac.jp/dspace/>）
（子どもの権利条約と子ども参加の理論 喜多明人）
- ・文教大学付属教育研究所 紀要第10号 生涯学習社会における「子どもの参画」についての一考（文教大学教育研究所客員研究員 五十嵐 牧子）
- ・国立オリンピック記念青少年総合センター研究 紀要第5号
中・高校生の雑誌政策を活用した地域への「参画」について－杉並区内の中・高校生による地域活動を事例として－（石井晶子）